まえがき

国際日本文化研究センターは、創設以来、年一回の国際シンポジウムを恒例としてきた。第一回の「日本研究のパラダイム——日本学と日本研究——」から第四回の「アジア・太平洋地域の中の日系人」にいたるものが、それである。

これらの成果はシリーズ・国際シンポジウムとしてまとめられ、すでに四冊が刊行されている。

この書物は、右をつぐ第五回の国際シンポジウムの成果をおさめるものである。(ただし、講演の一部は不収録) シンポジウムは「現代における人間と文学」をテーマとして一九九一年十一月二十五日から二十九日までの五日間にわたり、シンポジウムは当センターを会場とし、講演はとくに京都・都ホテルにおいて行われた。

テーマは、ともすると危機におちいりがちな現代社会における人間に焦点をすえ、この危機に対する文学の有効性を探ろうとするものである。そのために四つの論点が用意された。すなわち現代を形作っている伝統をどう見るか、現代という時代の中で個人はどのように生きているか、という大わくが二つ、さらに文学に焦点をすえた時に問題となる文学と社会の関係と、文学固有の表現の問題との二つ、あわせて四つの論点であった。

シンポジウムの形式として、以上の討議のほかに、二つほどの試みをもくろんだ。その第一は実作にたずさわる作家の重要な小講演で、日本の内外から中上健次氏と陳建功氏(中国)の二人を招待した。

もう一つはパネルディスカッションで、研究歴の長い学者を迎えて、その熟達した目から文学を語り合ってもらうというものであった。しかも専門も日本思想、心理学、文学と分野を異にする人たちにより、多角的な討論を期待した。

講演会はこれらに加えて、広く世間に学術を公開する目的をもって、アジアとヨーロッパと日本の代表的な識者によって催された。

幸い、以上のすべての企画は大成功をもってみのり豊かな成果をえることができた。読者がこの書物の上に、見られるとおりである。

シンポジウムに参加され、さらに書物に到る道程で多くの労苦を惜しまなかった方々に厚く御礼申し上げたい。なかんずく中上健次氏はシンポジウム後ほどなく冥に帰した。病身をおしての参加に、御礼のことばを知らない。

国際シンポジウム実行委員長　中西　進